

卓球によるコミュニティの参加と協議継続の意思に関する研究

石原匠

指導教員 前田和範

研究背景

卓球は年齢や身体能力を問わず行うことができる、「生涯スポーツ」としての特性を備えている。パラリンピックの正式競技としても採用されており、全国大会では小学校低学年の部から 80 歳代後半の部まで、幅広い年代が競技に参加している。日本卓球協会への加盟団体登録人数は年々増加傾向にあり、近年では全体の 7 割以上を高校生以下が占めている。特に中学生では、卓球部員数が男女ともに全競技中で上位にランクインしている。これらのことから、卓球は今後も成長が期待される競技の 1 つであるといえる。また、スポーツ庁は日本国民のスポーツに対する意識を高めようとしている。スポーツの実施についての調査結果を踏まえて、スポーツ実施率、運動習慣者の割合を増加させるという目標を掲げた。そのため、本研究では卓球歴と周囲の人たちとの関わり方の関係を明らかにし、生涯スポーツであり、若年層を中心に人気を誇っているスポーツである卓球を長く継続して行ってもらうことでスポーツ庁が定めた目標の達成の補助につながるかどうかにも着目し検討していく。

研究目的

本研究は、「卓球歴と卓球によってできたコミュニティの広さ」と「卓球歴と卓球によって形成された集団との関わり方」「卓球によって形成されたコミュニティの広さと関わり方」の 3 点を目的とした。

研究方法

大学の卓球部に所属している競技者を対象として、アンケート調査を行った。主な調査項目は、基本的属性、卓球歴、メッセージアプリ (LINE や SNS の DM 等) に登録されている卓球関係者の数、卓球を始めたきっかけ、部活動やクラブ等の卓球を通じたコミュニティの人々に会う頻度、ソーシャル・キャピタルに関する項目、受領的ソーシャルサポートに関する項目であった。

分析結果

卓球歴と卓球を通じたコミュニティの数は正の相関関係が認められた。しかし、卓球歴とソーシャル・キャピタル及び、ソーシャルサポートの平均値との相関関係は認められなかった。2 つの尺度について項目ごとに分析すると、卓球歴が長くなるにつれ、お互いに良い関係を築いたり卓球に関する相談を受けていたり卓球によるコミュニティに所属する人々から問題解決のためのアドバイスをもらっていたり技術面でわからないことは教わっていなかったりすることが明らかになった。

考察・結論

卓球競技において、卓球歴が長くなるにつれ、形成されるコミュニティは大きくなり、その中で役割を担うようになることが競技継続の意思に影響している可能性が示された。